

令和元年度第3回 市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議 会議録

日 時 令和元年11月21日(木) 10:00~11:30

場 所 姫路市市民会館 5階 第11会議室

出席者 委員6名 事務局5名

(委員) 藤本 真里 座長 米谷 啓和 副座長 大塚 優子 委員
安積 英孝 委員 川石 雅代 委員 橋 正人 委員

(事務局) 市民参画部 平石部長、市民活動推進課 藤保課長、
市民活動・ボランティアサポートセンター 佃所長 岸本主任 田代主任

次 第

1 開会

2 議事

(1) 第3次市民活動・協働推進事業計画進捗状況について
報告事項

(1) 10周年記念フォーラムについて

(2) 夏のボランティア体験について

3 閉会

会議の進行記録（要点記載）

委員： 議題 1 は第 3 次市民活動・協働推進事業計画だが、本計画の最終年度が来年度。来年度に次期の計画に入るので、進捗状況のチェックが必要になる。それでは事務局から説明をお願いします。

事務局： 資料 1
資料 1 第 3 次市民活動・協働推進事業計画進捗状況について
説明

委員： ひめじおんまつり当日に助成金申請を受け付けたとあるが、何人か。

事務局： 1 団体だけだが、作成していた資料に基づき、じっくりと説明した。

委員： ひめじおんまつり当日に賑やかな場所で相談するのは違和感があるのかも。ひめじおんまつり当日にするのが効果的かどうか。

委員： この計画には数値目標の設定や取り組みもあったと思うがその結果はどうだったのか。また、コーディネーター養成講座について、これは第 3 次計画の策定時に、私もかなり意見を言ったが、1 回では足りない。いろいろな人のつながりの中で物事を進めていくにはそのスキルがこれからますます重要になっていくので、残りの期間、あるいは次の第 4 次があるとすればそこでしていただきたい。

委員： 今まで自己評価で ABC というのはよく見てきたが、予定を上回る S は初めて。どういうものが S なのか、結果を教えてください。

事務局： まず、市民活動・協働推進事業計画だが、公表するものとしての数値目標は設定していない。コーディネーター養成講座については、来年度は検討したい。

事務局： 来年度以降計画の中で検討していきたいと思う。S の評価については、数値目標があり、例えば回数を決めて達成できたら A、大幅に数値を超えた場合は S をつけている。あくまで自己評価であり、ルールに基づいてそのような評価とした。

事務局： 具体的には、「啓発」の S は、例年行っている市政出前講座や公開講座の実施等に加え、学生を対象にした夏休みボランティア体験講座を新しい取り組みとして実施したので、S の自己評価をつけている。「既存の中間支援団体との連携協力」に

については、姫路市の NPO 活動法人ネットワーク会議や県内の中間支援ネットワーク会議に出席し、県内および市内の中間支援団体等と連携を図り、そして昨年発生した岡山県での災害発生時に社協と協働でボランティア活動に従事し、今まで以上に災害時の連携強化に取り組んだため、S 評価をつけている。「社会福祉団体等既存団体との連携協力した支援等の提供」についても、同様の理由と、災害時のボランティアセンター設置に関する訓練を実施し、より災害時の対応を強化したという理由で評価をつけている。

委員： 整理すると、目標はないとのことだったが、運用上はあるという認識で良いのか。

事務局： 説明が充分でなかったが、市民活動・協働推進事業計画において個別の施策について目標値を設定しているものもあり、設定していないものもある。目標値がすべてというわけではないが、目標値の達成で評価しているものもあれば、相対評価でつけているものもある。

事務局： 現在の大半の計画は、事業計画にあわせて目標値の設定、KPI の設定を計画の中でしているが、本計画はそういった形ではない。ただ、個別の事業としては、目標数値を持っている。

委員： 頑張っておられるのはわかるが、同じような事業や目標の中で評価に若干ばらつきがあるのが疑問だし、S 評価がこれほどあるのが珍しいのではないか。

委員： 目標値の設定が低すぎるのかもしれない。センター運営会議で議論するが、普段の事業計画の中で目標値があったと思う。この目標値での設定なのでこういった評価になっているのではないか。

委員： それならば目標値をしっかりあげるほうが良いのかもしれない。

委員： それはそれで、難しいところもある。目標値の回数をこなせば良いという考えになりがちで、その質的な評価が難しい。全体の課題として、評価のあり方を工夫しなければいけない。

事務局： 行政のどの分野においても、評価とそれを図るための物差しというのは常に課題になっている。単純に実施回数や相談件数などを目標値にして、評価するという割り切り方もあるが、それにこだわると個々の施策がかなり細分化される。複数の指標をまとめて大きな施策として見た時に全体的にどうなのか、問題点は何か

という部分は課題。アウトプット、アウトカムと言われているが、目標の回数を実施したというようなアウトプットの評価は、割と達成しやすいが、受け手側の満足度のような質的なもの、アウトカムの部分を測っていかなければならないと感じる。それは講座のアンケートの評価や意見などで生の声を拾って評価していくということが大事である。しかし、全体としてはまだまだできていないと思う。

委員： 評価のあり方を提案し、変えていくというのは、この会議の役割ではないか。評価の方法は内部から変えるのは難しく、外部から提案するべきである。質的な評価の方法を工夫することで、センターの現場の努力等も評価することができる。これに特化して議論してはどうか。今のように網羅的に評価するよりも、センターの事業で非常に重要な部分だけをいくつか捉えて、質的な評価をするといったことも考えられる。たとえば、ひめじおんまつりにおいて、どんな人材が育ったか、どんなネットワークができたかなどを評価することも考えられる。その方が、評価をする懇話会においても、現場のことがよく伝わる。皆さんがこれを見て、わかりにくいと思うのと同じように、懇話会ではもっとボリュームのある資料を見るが、現場がどのような感じなのかがわからないという指摘もあり、よし悪しの判断がしにくい。センターの外部組織である、この運営会議で評価について議論し、提案することは重要である。

委員： 数値的なものがないと比較できないとは思う。何に対して次は何をするということ掲げて、その後に PDCA サイクルの中で、できた、できないという評価をして。たとえそれが C 評価でもその原因さえ出てくれば別に問題はないので、そういう評価の仕方を考えてはどうかと思う。やったことを羅列しているが、もう少し簡素化したほうがよいと思う。

委員： 何を成果としたいのか、また、層が違うので、その整理が必要である。システム思考という考え方があり、関連性を図示していくと、このポイントを変えると全体に影響を与えるというレバレッジポイント、つまりここになるポイントがある。その思考を用いて市民活動の関係性を解きほぐし、レバレッジポイントを重点的に具体的に評価していく、そうすると整理ができ、逆に足りないところもわかってくる。また、中間評価の段階で A ならば、残りの期間の目標設定を上げないと、残りの期間のモチベーションがあがらない。システム思考と分析作業については、いずれ運営会議で検討してはどうかと思う。

委員： 評価の中でボランティア活動の参加というのが2つほどあったが、これはただ単

に参加しただけか。人材の養成の意味もあるのか。

事務局： ボランティアバスの話だが、7月7日に岡山で豪雨災害があり、1週間後に兵庫ボランティアプラザからの要請で、県の災害ボランティア活動支援関係団体連絡会議のメンバーで岡山県総社市へ被災地支援に行った。それは、各種 NPO などの県域団体との連携と、支援方法についてのノウハウを知るといった目的があった。

事務局： 災害時、社協と一緒に災害ボランティアセンターを立ち上げなければいけないが、それにはノウハウが必要なので、実際現場に行ってノウハウや対応を学んできた。そこが一番の目的である。

委員： ひめじおんまつりでの相談が1件あったということだが、単純に件数だけでは測れない面もある。相談は即効果に直結しない場合もあるので、評価には、時間差という観点もあると思う。

委員： 評価とは違うが、例えば姫路に住んでいる人が災害発生時にボランティアをしたいと思った時、どうすれば良いのか。

委員： 通常のボランティアセンターは全国的には97%が社会福祉協議会が持っているが、姫路の場合は行政が市民活動・ボランティアサポートセンターという形で運営している。災害ボランティアセンターについて、姫路では市役所が運営するのかという話になったが、協議の結果、設置については市と社協とで行い、運営については社協がすることになった。ただし、大規模災害発生時は社協職員だけでは運営できないので、市も協力して運営することになる。災害の内容によって市内、県内、全国など募集の範囲を決めて、募集のアナウンスをする。

委員： 1. 17の震災時に聾唖の関係の方々がボランティア団体を立ち上げて、現地に行ったり、姫路で通訳をしたり、情報提供をしたこともあったので、姫路の場合どうなのかなと思った。他市で災害が起こった場合に、まず姫路市民の立場としてどこへ行けば良いのか。

委員： 例えば、台風15号の際は社協としてはボランティアバスを出してないが、去年の真備町や西日本豪雨災害のときはボランティアバスを3回出した。その際は新聞やホームページでアナウンスして募集をかけたが、県外であれば、まず社協がボランティアバスを出すか出さないかを定める所から始まる。出さない場合は、県のボランティアプラザなどで募集の情報があつたら、そちらを案内する。今回、

10月の台風では日本接近が複数回に渡ったため長期的になり、被害が広域になった。また、11月は全国的に行楽シーズンであった上、観光バスの事故以来規制が厳しくなったため、観光バスと運転手の確保ができないということもあったので、ボランティアバスは出せなかった。県内では神河町の社協がどうにかバスを確保して出したと聞いている。

委員：重ねて言うが、進捗状況となると評価の話になり、評価は難しいという話で終わってしまうが、それでは同じことの繰り返しになる。システム思考のループ図を描くと、レバレッジポイントがわかるし、基本指針の中でも相互の因果関係や各施策の中の関係性やポイントが簡単にわかるので、是非そういう分析をして、ポイントや、そのフィードバック、アウトカムの整理をしたいと思う。もう一つがSDG's、持続可能な成長目標という世界共通の物差しが作られたが、その17の目標に当てはめていくと、それぞれのやろうとしている取り組みや位置づけが明確になるので、その整理も効果的かと思う。今回やっておけば、第4次の計画や評価の指針として役に立つと思うので、それを検討・調査していただきたい。

委員：それは具体的なので評価もしやすい。想像するに、システム思考でループ図を描いたら、ひめじおんまつりがキーになるのではないか。ひめじおんまつりをどう成長させていくか。今、実行委員会の方も将来を意識してバージョンアップにトライしておられるが、ひめじおんまつりを行う姫路市、センター、実行委員会の関係性とかいうのもそろそろバージョンアップさせてもいいのではないか。これは第4次市民活動・協働推進事業計画を考える時の提案になるのかもしれないが。現在、実行委員会が中心で、それを市役所がサポートするが、財政的な部分は姫路市が管理しているという関係性である。実行委員から見て、こうなったらという意見はあるか。

委員：最初、あまりにも一生懸命やりすぎた結果、予算がつかなくなった。いい意味の市民と行政のタッグマッチではあったが、やはり予算が少なすぎる。それぞれでできることを自前でやるという形で始まったのだが、それが良かったのか悪かったのか悩ましい。

委員：実行委員など担い手の負担が大きいなら規模を縮小することも検討してはどうか。自分たちで自由に使える予算の方が、市役所の複雑な手続きを経て使う予算よりもよいのではないか。

委員：予算全部でなく、一部を実行委員会に委託にする形でも違うかと思う。

我々が思うところにお金を使える委託事業の形になればいいが、そうすると予算決算の管理をする人が必要なので、それはそれで難しいところ。

委員： 基本指針6の「民間相互の協働推進」とある中で②「多様な主体との協働の推進」で、ここに企業というのがでてくる。そこを踏まえて、企業の協賛金を取れないのか。

委員： 受け付けてない。

委員： 募集できないのか。それはただ単にお金を集めるだけの話ではなく、協働という意味合いを持たせれば良いと思うが。官民連携というとおおげさかもしれないが、民間資金の導入という縛りがあるのか。

事務局： 実行委員会の方で集めるのであれば問題ないと思う。

委員： 当初、始めたときの考え方が、実行委員会形式でまつりをやろうということではなくて、センターの紹介も兼ねて集まって発表の場を提供しようということだったので、それはちょっと違う。

委員： 最初の経緯は、登録しているグループが一同に集まった時に、今必要なことは何かを話し合った。結果、お互いの活動について話せる場、まだ活動していない市民への発信のための場としての「交流」を持つということだった。その議論の過程で、負担が大きいかまつりというのはどうかという意見もあったが、結果的に全体の意見としてひめじおんまつりを始めることになった。センターの宣伝などは後付で、市民の側からそういう場を持ちたいという話があって起こったものである。だからこそ最初、皆さん頑張られた。それを、今後も発展させるために、どういう形が望ましいか検討すべきところである。

委員： 実行委員会として財布を2つ持ち、市からの予算と民間資金からの募金でまかなえば良いのではないか。

委員： 誰が管理するのか。管理するための事務局が必要になる。

委員： それは市役所ではタッチできない。

委員： その点は、もちろんそうだ。回数を重ね、問題が出てきているのは事実である。

また、会場についてもバリアフリー的な問題が解決していないというのがネックにもなっている。しかし、結局それだけいろいろな方々に参加いただいているという意味で、量も大事だが質も大事になってきていると感じている。

委員： これについては、大きな課題なので、また検討したいと思う。

委員： 地域における協働の推進という箇所に B という評価がある。事業計画を見ると、地域づくりハンドブックの活用とあるが、このハンドブックはどの程度活用されているのか。

事務局： 市民活動推進課で作成しているもので、市の HP にも掲載している。内容は、自治会等の地縁系の団体とボランティア団体等多様な主体が連携していくための簡単なガイドブックである。

委員： HP を見ると、事例も紹介しているが、更新はされてるのか。活用の度合いはどうなのか。

事務局： 地域での自治会や市民活動等についてアドバイスできることを掲載し、それを活用いただくことを想定している。相談があった時に提供したり HP を案内したりという活用をしているが、具体的に活用の成果が見えるかということ、そうでもない。また、27年3月以降更新していない。

委員： あまり使用されていない、効果が少ないのであれば、また別の知恵が必要かと思う。

委員： 繰り返すが、コーディネーター養成講座は連続講座という形で開催してほしい。NPO やボランティア団体のコーディネーターの養成も大切だが、今、自治会でのコーディネートの重要性は増している。例えば、自治会の中に協働コーディネーターがいるかないかで随分その地域の活性化や、地域の事業のマネジメントが変わってくる。協働コーディネーターなどは、NPO、ボランティア団体に限らず自治会等地縁団体を含めた開催が良いのではないか。今、姫路市の小中学校の適正規模、適正配置の審議会に出ており、そこで学校の統廃合の話も出るが、その前に小規模特認校を導入してはという流れになっている。その中で学校地域協議会を校区で作って、学校だけでなく地域も主体性を持って共に力をつけ、児童数や移住者数を増やそうという話になっている。今、教育委員会では学校長がその役割を担っており、スキルを持った方、あるいは適性のある方が赴任されれば

問題ないが、そうでなければ難しい。また、学校長は3年程度で異動があるので、その地域に協働コーディネーターがいるとその存在は大きい。他の部署との関係性がわからないが、自治会における協働コーディネーターは重要なので、そういったことも視野に入れていただきたい。

委員： センターは NPO などのコーディネーターを想定しているのかもしれないが、テーマ型のコミュニティである NPO 等と地縁型をつなげていくことは今後必要なことである。協働コーディネーターの養成は、協働の市民活動推進課の案件でもあるので難しいが、どちらかがどちらかに踏み込んでいくべきかと思う。

事務局： コーディネーターについては、NPO 活動のみならず地縁系の地域活動においても重要だと認識している。地域活動の充実支援事業の実証実験について安富北地区、手柄地区、高浜地区から応募があり、選定の結果、その3地区の実証実験がスタートし、市民活動推進課の職員が3人一組になって、各地区の会合等に参加している。ある地区では自治会や婦人会やPTAなど各地縁系のいろんな団体があるが、各種団体が情報共有できていないので、そこを顔の見える関係を作ろうという思いがある。今はそれぞれが会議をしてそこで完結しているので、地域の方々、特に連合会長が、連携してその関係をより一層緊密にしていきたいという思いを持たれている。その協議の場で、行政がいろいろ言うのと押しつけになり、かといって自治会長が言い過ぎるとトップダウン型のようにとられることもあるので、なかなか難しい。そういった経緯から、外部から、明石の一般財団法人コミュニティ創造協会からコーディネーターを呼んで、まず勉強するところから始めた。その方は、行政のことも地域のことも理解し、いろいろな事例も把握されているので、他の地域の事例や注意点、住民アンケートによる効果などを説明し、時間のなかで全員が意見を言えるように配慮して会議を進めてくださる。その様子を見て、コーディネーターという役割は非常に大きいと実感した。また、小中学校の適正規模、適正配置について、学校地域協議会を作る方針が検討されているが、校長先生の負担は大きいし、別の地域から赴任されてきた場合は地域の実情を把握するのに時間がかかる。また、その方が異動するといった問題もあるで、そういった協議の場においても、その役割の方が必要。行政がやるべきことは、これから練っていく必要があるし、場合によっては新しい施策として考えていかなければならないが、いずれにせよコーディネーターの養成は重要だと思う。

委員： コーディネーターは大切な役割だが、自治会からすると役員が2年に1回交代するような地域もあるので、中心となる役職を作るなどその組織の形も考えなければならぬ。

委員： 公民館をコミュニティセンターにしていく流れがあるが、協働コーディネーターのスキルが大事だと思うので、センターで開く講座ではあるが、参画のあり方なども検討してほしい。

事務局： 報告事項1
資料2 10周年記念フォーラムについて
説明

委員： 最後のアンケートについて、外部評価という点からこのアンケートの結果をどう分析したかを、次の機会に報告してほしい。属性など、年齢や男女比などはバランスがいいと思ったが、アンケートを取って終わりでは意味が無いので、評価という意味でも是非分析してほしい。

委員： 自由意見を熟読して、何が重要かというあたりも報告してほしい。

事務局： 概ね、参加者はそもそも関心が高い方が多いので、必要性を改めて認識したとかこれからも活動していきたいなど、どちらかと言えば良い結果になっているかと思う。

委員： 分析して次の機会に報告をしてほしい。

事務局： 報告事項2
資料3 夏のボランティア体験について
説明

委員： 受け入れ体制としての報告になるが、学生と連絡はついたが、その学生が間違えて違う場所に行ってしまった。地図や、住所を明記するなどの対応が必要だったというところが反省点。しかし参加者は一生懸命されて、参加者も受け入れ側も楽しかったので、今後も続けていただきたい。ただ、期間を8月だけでなく、できれば7月と8月にしていただけたらありがたい。

委員： 所属の質問で、属性の大学のカウントは0で、大学名は2つあるが。

事務局： ボランティアの参加はあったが、アンケートの回収結果としては大学生から回答がなかったのでこの表記である。

委員： アンケート結果を羅列するだけでなく、夏ボラの事業の目的も踏まえて、次の改善点や、次の展開への検証が必要だと思う。

委員： アンケート結果には必ず分析結果が必要である。事業直後は担当が覚えているかもしれないが、今後のためにもやはり記録は残しておいたほうがよい。

委員： 市民活動推進事業計画が5年毎だが、姫路市総合計画の策定と期間がずれているので、どう議論していくのか、総計にどう反映していくのかを聞きたい。

事務局： 総合計画については、今年度から2カ年の策定期間を設けて、本運営会議の座長にも総計の分科会の会長をしていただいている。市民活動・協働推進事業推進計画については、来年度1年間をかけて改訂作業を行うので、総計のスタート時と次のこちらの第4次の協働計画はスタートが同じになる。また、総計の分科会には、こちらの市民参画部長が事務局側として拝聴しているので、そちらの動きと連携しながら進めていきたい。総計の方は、将来的な市全体の話で今後の10年、20年先を見据えた方向性を出していき、それを具体的なレベル、施策的なレベルに落とし込んで行くのが、こちらの計画と思っているので、連携を図って進めていきたい。

委員： では、時間になったので、終了したい。次回の会議日程について、事務局から提案等はあるか。

事務局： 次回の開催について日程調整

2月7日（金） 10：00からで決定